

小ブル藤森成吉に与う

一、小ブルという言葉

文学者と婦人は、えてして小児病であるといわれる。小児病という言葉が、ほんとうはどんな意味になるのだから、私は知らないが、人のいうのを聞いていて、それで察した所では、単純で、お人善しである意味もあるらしい。

単純でお人善しであることには、それ自身貶すべき点はないであろう。しかし、そういう性格の所有者は、しかとした信念でなしに、例えば流行といったようなものに促へられる。そして人の真似さえしていれば、何かこう、それが勢力を背景にした、非常に強い、だから正しいことのように思う。

ロシア帝政の頃、すべての貴族が、恋人という言葉を嫌って、情婦（いろ）という呼び方を好んだ。彼等はいった。「恋は高い心にはなく、低い美にあるんだ。ねえ別嬪、そうじゃねえか」彼等はこうした生活の態度を、時代の尖端を行くものであるとした。町の者

たちは、競って人後に落ちまいと努めた。

ところで彼等から遠く離れている農奴の村に、「高い心」の恋が生まれ、その若い男女によって、その恋と同じ「高い心」に貫かれた新興の運動が、社会的に捲き起された。

時代の尖端を行くという心持ち、態度などというものは、多くの場合、全く怪しいものであることが多い。真実新しいものは、そういう意識も、態度もなしに、何時知らず実行が先きになって出てくるもののようなのだ。

だが、小児病の患者は、何時の場合でも、「時代の尖端」ということにのみ、恐ろしく神経過敏であるように見える。

今日でいうなら、小ブルという言葉の濫用など、確かに一種の小児病的なそれであろう。この言葉は、始め何処で言われ出したものか知らぬが、現在にあっては、最も多く文学者の間で言われている。全く今頃、文学者たちのみが必死的に、この言葉のために、精力を消費している。

彼等は、この言葉一つで、その価値を取り決めるのである。小ブルと言い、プチブルと罵れば、それだけで一つの致命傷を与えることになる。

従って、敵味方、否、味方同志すらが、それ小ブル、いやプチブルといった具合で、乱射乱発雨あられノだ。

七月号で、八木秋子氏が、藤森成吉氏に宛てた公開状を書いた。それに対して彼藤森氏

は何と答えるであろうか。たぶん「お前のような小ブル婦人には答える興味はない」ぐらいのことであろうと予期していた。そしてその予期の通りであった。

然るにそういう彼藤森氏に対して、「汝こそは絶対にプチブルだ!」と、岩藤雪夫という文芸戦線の若手の文士が、ついこの間の読売新聞の文芸欄で断言した。曰く「藤森成吉氏はプロレタリアの生活も感情や感覚も知らない癖に『俺一人面』をしている。氏は絶対にプチブル作家である」

このまた岩藤氏を、藤森氏は「岩藤雪夫氏の作品は、深く考えるべき物を与えない。これは彼のイデオロギーによる」といった具合で、即ち小ブルの陣営における一人であると評している。

いやはや、何が何だか分からない。お互に小ブル、プチブルの投げっこで、こうした言葉の遊戯こそが、彼等にとっての「尖鋭」な闘争であるのだろうか。

だが、彼等自身にとってはどうか知らないが、最早や、この言葉の価値は、何だか非常に安っぽいものになった。藤森氏が、この安っぽい言葉で、八木氏に答えたとして、それは氏自身を傷つけることにしかならぬのである。

「雑魚のトト笑い」とかいって、既に正札付きの小ブルの身でいながら、他の人を小ブルと評して笑うなどということは、知恵のあることではない。

二、勉強せよとの仰せ

八木氏に対する藤森氏の答えの中に「もっと勉強なさい」とある。

藤森氏自身どれだけ勉強しているか知らぬが、こうした言葉こそ、ブルジョアの意識のそれではないか?

かつてブルジョア文学の盛んであった頃、新聞などの文芸欄での闘争というのは、正堂々の論でなく、黙殺とか、無視とか、興味がなとか、こういったような卑劣な態度のものであった。そして「もっと勉強してから懸ってこい」「無学者でいながら何をいう」というようなことを言う人が多かった。

明らかに特権的な態度、言葉とか虚勢とかだけでこの威張り方、何と厭じゃありませんか。

あるブルジョアの女流教育家の言葉に、「総じて女というものは生意気になりたがる。一知半解の知識を楯に、世の有名な人々をも恐れず、何かと議論をしかけたりするものがあるが、心ある男子は、そういう女を最も不快なものの一つに数えている」とある。

けれど、私にいわせるならば、有名な人々をも恐れずに、多くの無学な婦人たち——彼女たちは、だから大抵無産者である——が、議論をしかけるといふ風が、少しでも認められるようになってきたというならば、それは非常に喜んでいいことだ。

今までは、あまりに学者というものを、恐れていた。学者——それは、途徹もなく、偉

大な種族のように思われた。これは勿論、哲学が生活を指導していた、早くいえば書齋が街路を見下していた頃の考えである。だが今や生活が哲学を支配し、街路が書齋を動揺せしめる時代である。この際、街路人の叫びは、たとい整わぬ字句、もしくは片言まじりの演説であっても、そこには多くの真理と強い力が感じられねばならぬ。

この意味における批評の自由、議論の自由は、ますます獲得されねばならぬ。いかなる無学者でも、恐れることなく、「愚文」を発表し、「拙言」を連ねるべきではないか。

由来特殊の権力というものは、その城に立て籠り、キユを許さぬとした時に、支持されていたのである。

例えば文芸で言えば、ブルジョア文芸家が実力以上の権力を握っていた頃にあつては、作品批評以外の批評は、それを邪道的のものであるとした。平林初之輔氏が「作品批評の没落」という文の中で書いていられるように、その頃は、「月評と称する毎月の雑誌にあらわれる作品の追隨的批評、御用批評が、文芸欄を賑わした」即ち御用批評とは、一口にいつて技巧とか、感覚とかに関する批評で、社会観といったような一般的、根本的な角度からの内容的批評でない。そしてそれはブルジョア作家の望むところで、彼等は「技術」という城の中に立て籠もることによって、世界観からの批評を防いでいた。つまり街路からの批評を拒んでいた。そしてそうした批評は、邪道的な素人批評であるとして、芸術は至高だ、芸術は超越する、芸術は芸術家のみのものだ。一般人の立場からのキユを許さな

い、芸術を批評しようと思うならば、少し芸術を勉強してからのことにせよ……、といった風であつた。

芸術を引きずり下ろせ、勉強なんか構うものか。我々の立場から、滅茶苦茶に批評しろ、という叫びが挙がつた。

かくて芸術は、その城から、一般街路人の前へと、引き出されてきた。

このように、今や一般人は、芸術のみでなく、すべての特殊な権力に対して、少しの恐れもなく、自己の立場から、無学者は無学者なりに、自由に批評することが必然であるとされる。

恐れるな、進め！ 然らば我等の街路的批評が、芸術をして、却つてその不純な部分を除去し、真に生命ある部分をのみ成長せしめたが如く、すべての学説、すべての論案等に対して、その非大衆的な様式および内容を突き刺すことによって、真のそのもつ力を助長し承認することができるであらう。

ある時代にあつては、詩というものは難解であればあるほど好いとされた。それと同様、学者の説の如きも、わかりにくいものほど、偉いものであると言われた。これらのことはすべて、嚴めしい金文字の韻文で書かれて、大衆から全く隠され、そうすることによって尊いとされた法典とかお経とかと同様の意味をもつものである。即ち支配者の偽瞞による恐るべき、根強い因習的な考え方がここに残されている。

藤森氏の「何を小癩な、もっと勉強せよ」といった態度は、明らかに如上の意味において、権力階級の意識から発している態度である。もしそうでないならば「貴女と自分との考えには多くの相違点がある」とだけ言えればいいではないか。

氏の短かな答え——故意に短くしたとすぐ考えられる——の全ての部分に満ちている見下したような物の言い様は、たまらなくかつてのブルジョア文壇を思い出させる。そこで、「勉強とは何であるか。それについて君自身の勉強のどんなものであるか、それから聞かして貰いたい」と私はここで藤森氏に一言申し上げて置く。

三、「アナ」への言い分

藤森氏は、「今更リアナリの人と論争する気はない」と言い、「それらの人々は非常に完全に小ブル的である危険がある」といつている。論争する気がないなら、始めから「小ブル的である危険がある」などとは言わぬがいいのだ。そういうことをいう以上、それはもう、自ら論争を希望していることになるのではないか。

「小ブル的とは何をさして言うか？ 殊更にリアナリにそういう危険があるとすれば、それはどういうことか。一々言ってほしい」と私どもとしては言わざるを得なくなる。また、それに対して、氏は確かに答える義務があるから、そこに「論争」の起こるのは当然ではないか。

それとも、一々指摘する能力はなく、ただ例の小児病的な態度で、「小ブルだ！ 小ブルだ！ どうしても。なぜなら人がそういうからほんとうだ」といった程度の非科学的な放言であるとしたら肯けないこともない。そういうことは、浅はかな附和雷同的な、そして更によそめには気の毒だが、当人は得意で——小さな見栄にあやつられて「威張」ることをしたがる癖のある人にあつては、珍らしいことではないからである。

八月の『中央公論』に載っている氏の作「選挙」と題するものを読むと、「奴だけが悪いんじゃないねえ、ほんとの階級的立場に立っていねえ社民党や大衆党の中にいりゃあ、人間もだんだん墮落するんだ」などと書かれてある。この作で、氏は自らの輝く共産党的立場から社民党や大衆党を「小ブル！」として鋭く批判しているつもりであるらしいが、結果は反対で、こうした「馬鹿」だけが共産黨員なのか、とすら思わせる。

単純に否定したり、放言するということは「馬鹿」でなくてはやれないことだ。その「馬鹿」さは、小さな見栄——ほんとうの信念からでなく、いかにも固い党派心であるかの如く装おうとする、また感傷的な忠義立て——からきていると思われる。

こうした男は、すべての党派の生む型であり、かの陣笠と呼ばれる種類のものがこうであるが、別な見方からすれば、党派にとって、一つの危険な存在であるとも言われる。党派がもし彼に利益（個人的——そして精神的たると物質的たるとを問わず）を与える能力なく、もしくは暫らくでも彼を甘やかさずに置こうものなら、また同じ陣営の有力者の中

から彼に対して少し鋭い批評でも浴びせるものが出ようものなら、彼は直ちにその陣営を裏切ることすらやりかねないであろう。

「非常に完全に小ブル的である」のは、夫子自身のことでは無いか。

同じ作の中に、社民系の当選議員がお礼廻りをして歩いているのを、「お礼廻り？ 糞ウ喰え！ 君達あブルジョア議員どもの真似をするつもりか」とこき下ろしている所があるが、私の記憶に誤りがないならば、藤森氏が何時か「磔茂左衛門」かそれとも別のものであったかを発表した時、それが可なり好評で迎えられて、舞台上に上されることになった。その時の藤森氏の挨拶（たしか読売かに発表された）に曰く、「好評を受けたことを非常に感謝している。妻などは、長年の不遇がやっと酬いられたと言って涙を流して喜んでゐる」

当選議員のお礼廻りととれだけの違いがあるか。

「アナ」の人は非常に完全に小ブル的である危険がある」と氏はいうが、——また氏と似寄りの人々もよくこうしたことを言うが——どこがそうか、細かに言って貰いたい。「非政治的であるから、非実際的になりやすい、従って小ブル的な危険がそこにある」というのであれば、同じ危険は政治主義の方にもある。彼等は余りに「実際的」になりやすく、従って妥協的、墮落的な傾向が強い。この傾向は、無産党の政治的経験と共に、いよいよ立証され、無産者は「政治主義は非常に完全に小ブル的である危険がある」ことを知るで

16
97

あろう。

氏はこれに対して、これ等の属する団体にあつては絶対にそうではない、というだろうが、それなら「アナ」もまた、そういえる。全部が墮落はしない。

「小ブル的である危険」は、いずれのものにおいても見られることで、ある一つが、殊更らそうであるなどということは、あまりに大人めかぬ言い方であるといわねばならぬ。

「わが国の無産運動にあつては、既にアナキズム、及びサンデカリズムは、完全に清算されている。百の議論よりも、この一つの事実が何より有力である」と、得々と、少しの疑いもなく、述べ立てている人を見るが、もしそうであれば、共産主義もまた、今やその意味でならば完全に清算されたではないか。

わが国の無産運動は、政治運動への展開と共に、初めにアナキズムおよびサンデカリズムを否定し、次に共産主義を、そして今後にあつては、明らかに社民主義への進展となり、さて然る後には、資本主義への合同となるのであるか。

この意味において、いわゆる「清算」は、資本主義の側からであり、わが国無産運動は、政治主義への展開と共に、資本主義への合同の過程にと辿り入ったことになるのではないか。

ある主義が無産運動の表面から消えたこと——それは同時に資本主義からの圧迫を意味する——を以て、直ちに「清算」されたものであるというなどは、あまりにもお人善的

の考え方であるといわねばならない。

初め資本家の憎悪は、全くアナキズムに集中され、共産主義に対しては、それに比べる
と非常に寛大であった。アナキズムに対する彼等の憎悪は、震災時の暗殺となったのを見
ても分かる通りであるが、かくて表面上、全く圧迫し得た彼等は、——そして彼等は非常
な巧みさで、民衆の心をすらもアナキズムから離反せしめることに幾分成功した。民衆は
アナキズムを恐れ、そして疑い、かつ空想的であるとする。そして、この民衆のアナキズ
ムに対する離反に、内部から助力を与えたものは共産主義であった——次には共産主義を
征伐すべく企らんだ。そしてそれもまた、計画的に、着々と成功し、今や民衆の心を、共
産主義から離反せしめることにすらも、完全に成功しつつある。民衆は共産主義を恐れ、
そして疑い、かつ空想的であるとする。そしてこの民衆の共産主義に対する離反に、内部
から助力を与えているものは、左右両翼の社会民主主義である。かくて無産運動は、計画
的な資本家の圧力の下に、いよいよその資本家の意志の通りの進路を辿りつつあるのであ
る。

だが、かくて無産者は、遂にこのまま自覚せずして終るであらうか。初めにアナキズム
を「清算」したと称し、次には共産主義を「清算」したと叫び、かくて次第に資本家の作
る陥し穴に我から落込んで行くことを続けるであらうか。

それは今のところどうともいわね。無産者は今後とも戦術的に多くの過誤を冒すであ
らう。

しかしいかなる混乱の最中にあっても、無産者がただ一つ見失わぬであらう、又見
失ってはならない目標——それはアナキズムの社会の実現ということである。無産者の理
想とする唯一の社会であるアナキズムの社会を求めて進むこと、そのことのみは、彼等
は決して忘れないであらう。かのイスラエルが沙漠を彷徨しつつも、理想の土地たるカナ
ンをば忘れることが無かったように。

四、アナキズムの絶対性

近世社会主義の特徴は、その目標をアナキズムに置くにある。藤森氏が「マルクス主義
とアナキズムとは、究極においては、全く同じだ」といっている通り、国家と権力の無き
社会へ、即ちそれはアナキズムの社会、故にこの意味において、マルクス主義は広義のア
ナキズムの一派として認むべきである。すなわちマルクス主義なるものは、アナキズム
の社会に達するための方法的な、手段的な一派として存在する——を以て、我等の目
標とする理想社会であるとする点に、近世社会主義の特徴がある。

ドイツ社会主義の立場として並び称されるラッサールとマルクス、この両者は、共にヘ
ーゲル哲学の影響から出発したが、この両者を明瞭に区別づけたものは、その目標の相違
にあった。

即ち、ラッサールは「国家」の完成を目標とし、マルクスは「無国家」を目標とする。

ラッサールは、それらの「無国家」主義者を呼ぶに、自由主義者（恣意主義者）であるといい、彼等と戦わなければならない、プロシヤの裁判官と協力することを辞せぬとまで言った。

ラッサールの所見によれば、既往において、社会が歩んで来た歴史の跡を究めると、それは階級支配の歴史である、ことが分かる。然るに第四階級の台頭は、最早や階級支配の廃止されることを意味する。何となれば第四階級こそは最終の階級であるから。

かくてその階級支配の廃止された時においてこそ、始めて真正の国家を実現しうる。

真正の国家とは何か、それは各私人をその恣意的な行動から救済し、真の意味の自由において統一する最高の機関である。然るに既往の階級支配の歴史中にあるのは、真正の国家は実現し得られず、そこには幼稚な未発達な国家を見るのみであったが、今や第四階級によって、階級支配の廃止せられると共に、国家は完成して、そこに真の使命を果たすのである。

というのがラッサールの国家観である。

マルクスはこれに反して、国家なるものは階級的抑圧の機関に外ならぬものであり、階級の廃止と共に、それは当然死滅するものであると見た。

即ち彼は、「国家と自由とは相容れない」と考え、——「自由ということの言われる社会の実現と共に、そこには国家は脱落する」（エンゲルス）——個人の自由発意の可能と

される総合的社会こそ、われらの達する当然の社会であるとした。

この両者の思想の相違は、そのまま前代と近代との思想の相違の一つの現われであり、歴史を前代へと遡れば遡るほど、個人の自由ということは全く「私事」とか「私情」とかいう、不名誉な考え方のもとに抹殺され、それに反して、いわゆる公的権力が絶大のものとされているのであるが——例えば婦人にあつていわゆる私情の最大な二つのもののうち、恋情は前代では全く穢らわしいとして否定されており、母性の愛情にしても、公的権力の前には全然蔑視され、母はその子供を国家に捧げるためには、しばしばその愛情を犠牲にしてその子供を殺しもし、またイケニエとして捧げもしたのである。わが国の母性美談の如きは、すべてがその私情的な愛情の讚美ではなくして、水兵の母とか、そのほかそれに似寄りの「千代萩」といったようなものであることを見ても肯づけるのである。

だが、こうした考え方は、近世へと下るに従って、次第に薄らいできて、それにつれて個人の自由ということが大きく頭をもたげ出したのである。

故に、社会主義の思想の如きにも、それが反映しており、かのプラトンなどの抱いていた社会主義的思想は、全く強権的なものであり、その理想とする社会は、上からの強権によって統一せられる社会であったが、近世における社会主義思想は、これに反して個人を重く見、その理想とする社会は、下からの聯合によって成る自由社会であるとするようになった。

かくて、アナキズム社会こそは、近世における社会主義的思想のもつ絶対の目標であり、近世におけるあらゆる社会主義思想——マルクスたるとクロポトキンたるとを問わず、それが真に近世のものである以上は、アナキズムの社会を目標とするものである点において一致しているのである。

ここに、アナキズムの絶対性があり、この意味において、アナキズムこそ、唯一の近世社会主義である。すなわち近世社会主義とは何か、それはアナキズムであるという答えが得られるのである。